

小津安二郎の特異性

2023年は、小津安二郎（1903～1963）の生誕120周年で没後60周年という年でしたが、2023年10月に東京国際映画祭で行われた「小津安二郎生誕120周年記念シンポジウム」で黒沢清監督が、「宗方姉妹」（1950）についての発言は興味深いものでした。その発言とは、「僕は男性が無抵抗の女性に対して、ここまでひどい暴力をふるう瞬間を映画の中でほとんど見たことがない。（中略）すさまじい描写、断絶した人間関係が暴力沙汰に陥る瞬間を喜々と描いている。小津のどす黒い欲望が垣間見える」というものです。「喜々と描いている」かどうかは判断の分かれるところであると思いますが、小津作品では珍しく登場人物が感情を抑制することなく、暴力に訴えた場面です。

1927年から1963年までの監督作品は存在するもので54本（サイレント時代の作品の中に現存しない作品があり）ですが、通常小津作品といえば極めて静的要素の強いものを思い浮かべてしまいますが、長い監督生活の中でこうした作品もあったのです。「風の中の牝鷄」（1948）も壮絶です。戦後まだ戦争の暗い影が世間を覆っていた時代に、はずみとは言え無抵抗な妻を梯子のような急な階段から突き落とす夫はまさに悪鬼の如くです。この殴られたり階段から落とされる役はいずれも田中絹代であり、特に階段落ちのシーンはワンカットで撮られ、おそらくご本人がスタントなしに落ちたものだと思います。（つなぎで撮ったとしたら見事な編集技術です）ここまでの演技を要求する小津という監督は、やはり「どす黒い欲望」を持った人なののでしょうか。余談ながら、小津安二郎のサイレント作品「非常線の女」（1933）で、やくざの情婦役の田中絹代がピストルを構え相手を睨みつけるという珍しいシーンがあったと記憶しています。

評価の高い「麦秋」（1951）にしろ、これは一家崩壊・離散を描いたものであり、しみじみとした情感を持ちながらも、あまりに残酷な状況を表現した作品ではないかと思うのです。あの「東京物語」（1953）にしろ同じテーマに加え、故郷に帰り着いた老妻が亡くなってしまおうという最大の悲劇をもたらします。安穏とした平和なホームドラマの領域とは相容れない、人間のどろどろとした感情とか過剰な事なかれ主義や個人主義が描かれているような気がするのです。当然、時代的な背景もあります。戦後の価値観の大きな転換を余儀なくされた中で、従来の家父長制度に基づく家族の構造に変化が起り、どうしても旧弊な価値観から抜け出せない人たちも多くいたはずで、そうした人たちは、価値観の異なる人達との間で大きな摩擦を起こすこともあります。

小津の亡くなった1963年の松竹の監督会恒例の新年会の席上起こった、ある事件は小津の旧弊な価値観を表すものではなかったと思うのです。この事件は、新年会の開始早々から小津が新人監督で監督会の新メンバーとなった吉田喜重を相手に執拗に絡み手に負えなかったとういうもので、小津の怒りの原因は「シナリオ」誌に掲載された「秋刀魚の味」（1962 遺作）合評会での吉田喜重の言葉に向けられたものらしいということになっています。小津は吉田の批評のどこが気に入らなかったのかははっきりと言わないので、吉田としても反論のしようもなく二時間近くただ無言でじっと座ってままだったのです。小津五十九歳、吉田二十九歳のときで、「小津さん、あなたは監督なんだからお止めなさい」と中に入ったのが木下恵介でした。酔った小津は、吉田喜重相手にしきりに「俺はな、橋の下で菰をかぶって春をひさぐ夜鷹なのさ。吉田君、君は橋の上にいるのだろう。橋の上に立っている人間なんだろう」と絡んでいたといいます。小津安二郎という人は、常に孤立感を抱え、学歴コンプレックス（吉田喜重は東大仏文科卒）と晩年期に松竹ニューウェイヴと呼ばれる新鋭監督たちの出現に脅かされ、自分自身を防衛しようとするメカニズムが働き、相手を攻撃する拳に出たのではないかと考えるのです。小津の本質的なところには、僻みと超の付くほどのエゴイズムがあったと思えるのです。

親子の断絶、家族の崩壊をテーマにした「東京物語」が発表された年に、松竹大船を代表するもう一人の監督である木下恵介が同じテーマで「日本の悲劇」を発表します。試写を終えた篠田正浩は、「大船をやめて荷物をまとめて故郷に帰る事しか考えなかった。このまま撮影所にいっても一生かかったってあれ以上のものは作れっこないと思った」と言い、試写の後に誰もが釘付けになったまま身動きできなかった作品です。壮絶なこの悲劇性は一度見れば決して忘れられない迫力があります。

この二作を小津の助監督の経験を持つ作家の高橋治は、「木下は人間の胸の底から嘘偽りのないものをつかみ出して来たように描き、小津は人間の持つ醜くさの総てを、紗にかけたようなほのかな奥行きの中で見せた」と言い、「『東京物語』を「精緻極まる細密画を寸毫の計算違いもなく仕上げた完璧さに貫かれている」作品とし、『日本の悲劇』を墨のかすれも気にせず筆太に一気に書ききった躍るような筆致がある」と評します。

そして、小津は木下のこの作品を「野心作ならむも一向に感銘なく、粗雑にして、すの入りたる大根を嘯むに似たり」と日記に記します。そうした小津は、高橋治に言わせると「不逞で、もっと凄さを秘めた男」と言います。なるほど、小津の作品の影の部分には、「衣の下の鎧」的怖さを見せながら、パラドキシカルに言えば、「不逞」であり「凄さをひめて」いなければ、死して六十年を過ぎて未だに感動と感銘を残す作品を作ってはいなかったのではなかったということです。（2024.2.05）